

妙国寺寺報

平成二十年九月発行 第十一号



「ウサギの布施」

長く感じられた夏も終わり徐々に朝晩肌寒く感じられるようになってきました。ふと、気づくともう9月です。九月といえば中秋の名月、今年は九月十四日が十五夜で中秋の名月でした。ふと月をじーっと見上げると、なんでウサギがいるように見えるんだろう……。小さい頃よく不思議に思ったものです。

さて、仏教の寓話に「ウサギの布施」というお話があります。

ある所にウサギとサルとヤマイヌとカワウソが暮らしていました。ウサギは皆のリーダーで仲間たちにいつも仏教の話聞かせています。いつも口癖のようにウサギが言っていたのは

「布施をしなくてはいけない」ということでした。翌日が精進日という前夜、ウサギは皆に言いました。

「明日は精進日です。私たちは布施をしなくてははいけません。物乞いの人が来たら、必ず食べ物を施すようにしましょう」翌日、それぞれ食べ物を探しに出かけました。

カワウソは河の岸辺で七匹の鯉を見つめます。でもこの鯉は誰かが捕ったもので網の中にいました。周りには誰もいません。「どなたか、この魚の持ち主はおられますか？」とカワウソは三度大声で叫びました。答える人がいなかった。「これは落し物だ！しめしめ」とばかりにこの鯉を自分のものにしてしまいます。

ヤマイヌは畑の番人の小屋で、串にさした肉を見つけました。「どなたか、この肉の持ち主はおられますか？」とヤマイヌも三度叫んで、持ち主はないものと判断して、それも自分のものにしてしまいました。サルは森に行つてマンゴーの実を拾ってきました。

ところが肝心のウサギです。ウサギは常に草を食べていけばいいので食料の準備などしたことがありません。物乞いの人が来れば何を施そうか……。ウサギはちよつとそのことを考えました。

そして、「そうだ、私の体の肉を施せばいいんだ」。

天界では帝釈天がこの様子を見ていました。ウサギは本当に自分を犠牲にして施しをするのだろうか……。実際にそれを試してみようと、お坊さんの姿になつて下界にやつてきました。帝釈天は最初にカワウソのところにいきます。

「ああ、お坊さん、どうぞこの魚を召し上がってください」用意してあった魚を、カワウソは施します。ヤマイヌにもサルにも用意がありました。しかし、ウサギのところには何も布施するものはありません。

「ですが、お坊さん、どうか心配しないでください。わたしはこの自分の肉をあなたに施します。だからあなたは薪を集めて火を作ってください。そうすれば私とその火になかに飛び込みます。」

帝釈天は薪を拾い集めて火を作りました。ウサギはその火の中に飛び込みます。けれども帝釈天のつくった火は、氷のように冷たくてウサギは火傷ひとつしません。不思議に思っているウサギに帝釈天は、私はお前の気持ちを確かめるために来たのだと告げます。そしてすっかりとした布施の心を持つているウサギをほめます。

「世界中の人々が、そなたの素晴らしい布施の心を知るために、そうだ、そなたの姿を月に書いておこう」そう言つて帝釈天は、月にウサギの姿を描きました。だから私たちは月にウサギの姿をみる事ができるそうです。

